Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

進修同窓会 HP にアクセス

第１５２号

2022（令和４）年１月 25 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

「霞浦の月食」水郷公園から沖宿を望む
（黒岩英行（高 23 回）撮影 2021. 11. 19）

霞浦の月２　～湖上の月～

地域の人々は、二十三夜などで、霞ヶ浦の折々の月を愛でてきましたが、土浦中学生も、湖上の月を愛おしみ、その思いや言動を校友会誌『進修』に綴る、などしています。

敬称を略し、引用文中の旧字体は新字体に改めました。また、引用文中の【　　】内は筆者による注記です。

月夜の霞浦

土浦中学生の中には、十五夜の宵に霞ヶ浦にボートを出し、月を愛でる生徒たちもいました。3年の箕輪對治は、月明の霞ヶ浦での漕艇を、『進修第5号』（1904［明治37］年2月発行）に、「月夜の霞浦」と題して、次のように記しています。

「我等が乗れる端艇筑波号は、今しも土浦を舟出して、霞浦の真中に出でたり、今宵は【1903年】九月の十五夜なれば、月は既に中天に登りて、水に映ずる光銀の如く、湖岸の村里は淡靄【あわもや】に罩【こ】められて、さなから薄雲をもて隈取りたる如く、筑波の峯の蒼茫【そうぼう 見渡す限り青々と広いさま】たる夜色に包まれて、遠く夢の如くに聳江【え】たちたるか、其麓の方は白霧一抹、いと朧【おぼ】ろに立ち渡れり、濃き黒色したる森影乃【の】長く連りて霧の隙【すき】に見江かくれせる風光また人の世のものにあらず、思はず我を忘れて幽渺【ゆうびょう】(注1)限りなき景色かなと叫びぬ、舳【へさき】に砕くる白波は、皎々【こうこう】たる月の光を浴びて銀の如くに閃【ひら】めき立ち散る飛沫は雪にも似たり。こぎ行く毎【ごと】に残り行く渦巻は湖上乃月を砕記【き】て銀線を布【し(敷)】けるが如く見江杳渺【ようびょう】(注2)として殆【ほと】んど鏡に似たる水面には玲瓏【れいろう 透き通るように麗しく照り輝くさま】たる月影の映じて一條の金紋銀波瀲灩【れんえん さざ波が立ち、光り煌めくさま】として輝き渡れり。うすら寒き秋風のさや〳〵と湖岸の葦【あし】荻【おぎ】に渡る毎に鏡の面に微暈【びうん かすかな光の輪】起りて金波銀波のふるひ動く様丹青【たんせい 赤と青(の絵の具)】をもて描くべくもあらず。

艇は次第〳〵に夕霧模糊【もこ】の裡【うち】に立てる長虹の如き沖宿【現土浦市沖宿町】に向ひて進み行く。嗚呼秋風いと冷【ひやや】かに身にしみ渡るこの夕豊ならむ人の瓊楼玉閣【けいろうぎょっかく 玉をちりばめたような、美しく豪華な建物】の内に観月の宴を開くべき望月の夜、なほ夜もすがら睡らずして妻子乃為につくせるもあるなり、実に悲しきは人乃世の運命にあらずや。

不意に蛍の如き一点の灯影沖宿のはなより表【現】れしが恰【あたか】も紅燈の旋転【せんてん】するが如し暫くありて我等が艇に近つくを見ればこれぞ土浦【鹿島航路】定期船【蒸気船】朝日丸にてありけり。我等が艇を行過くれば艇は三四回大波に打上げられ打下げられてき。汽船を見れば最早金波を後にして土浦さして進み行くなり。月はいよ〳〵明らかに秋湖を照して艇舷に咽【むせ】ふ水声恰も遠く笛の音に似たり。友皆興に入りて詩を吟じ歌を唱へ興を呼び快を叫び夜の更くるを知らず。声は限りなき四方の寂莫【じゃくまく・せきばく】たるを破りて溟茫【めいぼう うす暗く広々として果てしないさま】杳渺たる水の上に響きゆきたるがその響も次第〳〵に微【かす】かになりゆきたるが、冬【つい(終)】に蒼然【そうぜん 日暮れのうす暗いさま】たる暮靄【くれもや】の裡に鳴り渡る夕暮の鐘の欝蒼【うっそう】たる森蔭に沈みゆく如く消江去りぬ。

不意に舵手は呼びぬ。

夜は更けたり、最早帰り給はずやと、一同之に同意し又と得難き此の絶景を捨てゝ土浦にいそぎぬ、蒼茫たる大空には一縷【いちる】の繊翳【せんえい 小さなかげ】をも見ず月はいよ〳〵高く昇りゆきて的歴【てきれき 鮮明なさま】たりし湖上の金波銀紋、人や其跡を止めざりき、ひとり戛々【かっかつ 金属などのかち合う音の擬声語】たるクラッチ【オールの支点となる台座】の響は淙々【そうそう さらさらと水の流れるさま。またその音の形容】たる水の音と和して高く、漁人【ぎょじん・すなどり】の夢を驚かしき。」

箕輪たちが乗ったボート「筑波」号は、「霞」号とともに、1903年7月17日に命名式を行い、進水した1艇で、漕手4人、舵手1人の5人乗り。現在のナックル艇のようなボートであったようです。ナックル艇の船底は、公園などの手漕ぎボートに近い、角張った形をしていますので、速度では劣りますが、安定性には優れています。土浦中学生は、学校に届け出れば自由にボートに乗れたようで、箕輪たちも、十五夜の晩に漕ぎ出したのでしょう。『進修』に載せられていることから、学校側も問題にはしてなかったようです。霞ヶ浦沿岸に育った生徒たちは、和船に乗ることは日常茶飯事であったので、夜の湖に何の不安も感じずに艇を出しています。箕輪たちの中にも霞ヶ浦沿岸育ちの生徒がいたものと思われます。

(注1)**幽渺**・(注2)**杳渺**
「渺」は、（水が）広々として果てしないさま（例、渺然・渺茫・渺漫）。「幽」は、奥深くてもの静か（例、幽閑・幽谷・幽趣）。「杳」は、暗い・奥深い・はっきりしない・遥か（例、杳然・杳茫・杳冥）。
箕輪は、「渺」のみでは、「その時の霞ヶ浦の様子を正確に表現できない」、「自分の思いにもジャストフィットしない」という物足りなさを感じて、既知の「幽」と「杳」とを加えて、「幽渺」・「杳渺」と表現したのだと思う。
初めて目にする表現でも、同じ日本語を母語とする私たちには、文脈から意味は分かるし、また、そういう新たな表現をすることもできる。

湖上の月を慕ふ

5年の石島可也（中26回）は、『進修第25号』（1927［昭和2］年1月発行）に、「湖上の月を慕ふ」と題して、1926［大正15］

年8月の、中学生活最後の夏休みに、兄とともに郷里の歩崎【あゆみざき 現かすみがうら市坂】で見た十六夜（いざよい 旧暦16日の夜）の月の印象を語っています。

「長き休暇も残り僅か数日に迫りし初秋の一夜は誠に湿り勝なる小宵なりき。寂しき中にも亦物思ひまさる小夜なりき、待てども尋ね来る友も無く只吾が心の慰みとては庭の月見草のみなりき。その目覚むるばかりにあざやかなる微笑は真に愛らしき極みなりき、又その優しき、柔やかなるしかして爽やかなる情趣は見るから身に涼を集ふが如き心地なりき。暫し橡【とち トチノキ科の落葉高木】の椅子に寄りて切れ〳〵の涼風には吾が霊魂さへ何処かに奪はれたる如き夢現【ゆめうつつ】の体なりき。大空には数知らぬ無数の星淡き光をまたたきぬ。されど次第に其の光も淡くなりて空は只茫とし来りぬ。只涼風の尚身に触れ山吹の枝に練絹【ねりぎぬ】を裂く如き微妙なる虫の音暗にふさはしく響き渡りぬ。昼はかの百日紅【さるすべり】に法師蝉の鳴く音を小雨の中に聞き愈々【いよいよ】秋立ちたる心地したるに今宵又庭の一隅に此の虫の音を聞きて初秋の気は今宵に入りて一入【ひとしお】なるを覚えたり。土用明け後の陽気実に一日と争はれぬものなるを思ひて吾は此の虫の音に少なからず心を動かされぬ。折しも椎木の彼方には何時しか団々【だんだん 丸いさま】たる月かゝりて徐【おもむろ】に中天に昇りぬ。思へば今宵こそ陰暦七月十六夜なり吾月に誘はれてか兄と共に月明らかなる水郷の通を渚へとさまよひぬ。月は愈々明かなり空に漂ふ片雲だに無く湖上の月は徒らに吾が心を動かしぬ此地水郷歩崎の地なるよ、友に見せたきは実に月明の歩崎なり。霞浦唯一の勝地たる月下の風情こそ口に、筆に形容の一句だに無しとは此事ならずやと思はれぬ。真に夏の夜の歩崎の月、霞浦の月は水郷ならずば味ひ得ざる美感ならずや、沖の彼方より吹渡る涼風玲瓏たる月光と霞水の冷を受け一入の涼味なり。涼風に加はりて彼方沖合より鼓の音いと拍子善く響き来りて兄と共に湿れる静かに【静かに湿れる】渚をつたひぬ。渚に寄する小波ザハ〳〵と清光と共に砕けぬ。

一歩一歩砂を踏む足跡ザク〳〵音するのみにて辺【あたり】は只静寂なる月下の世界なり。月の青白き光と照らさるるものゝ青白き水郷の良夜なり、皎々たる月色の万波に映じ遙か彼方には茫然として、あたかも淡靄の中に見ゆるが如き麻生の岬、十六島(注3)の辺かと思はるる遙かの森、煙の如くその情趣まことにえも言はず。兄も吾も共に月明らかなる湖上の景にみとれぬ。暫し恍然【こうぜん 恍惚】としては自失しぬ。折しも櫓声いと微かに舟遊の舟帰り来りぬ。其の舷湿つとりと、ぬれて身に一入の涼味を覚えぬ。吾とある知人の家なる桟橋に佇みて大空を仰ぎぬ。月は徐ろに高く頭上まで昇りぬ。自ら嘯くが如く上天を仰ぎ居れば知らず〳〵神秘に引入れらるる如き感生じ来りて袂【たもと 和服の袖の下方の、袋のようになった部分】をはらう涼風は又一入心地よかりしなりまことに此上もなく心地善き初秋の今宵には霜なく空に過雁【かがん 空を過ぎ行く雁】なければ此の皎々たる月光を慕ふのあまり吾は転く【ますます】懐古の情に堪へず

霜満軍営秋気清【霜軍営に満ちて秋気清し】
数行過雁月三更【数行の過雁月三更（さんこう 午後11時頃から午前1時頃までの間。子の刻）】(注4)
越山併得能州景【越山（えつざん）併（あわ）せ得たり能州（のうしゅう）の景】
遮莫憶家郷遠征【遮莫（さもあらばあれ）家郷遠征を憶（おも）う】

と声を沈めて吟じぬ。ああ歩崎我にとりては如何になつかしき地なるよ。観世音の霊地(注5)なる故か月の美なる故か将【は】た水郷なる為なるか。

「湖心の月影（イメージ）**」**（上）
歩崎から、対岸は浮島
「歩崎観音」（右）
（飯村弘（高５回）撮影）

わけて最終学年の休暇なれば印象深き事も多かりしに、月明らかなる今宵月光を慕ふの情は強き唯一の印象とはなりぬ。休暇も残り少なとなり下宿の一室に帰る日の又遠からざるを思へば一入(注6)の、なつかしさなり。吾には此の十六夜の月忘れがたく、夜の更くるも知らで兄と共に小波絶間なく寄する渚を又桟橋を幾度か行きつ戻りつしぬ。

思へば今宵の月に別かるるを惜しみしなり。何ぞ今宵の月の爽涼清澄なる。

ああ是湖畔の月ああ漁村の月。遠く異国の空に見る人の今宵の月をば如何に仰ぎしぞ、故国の山川草木も月の面に朧【おぼろ】に映じたるにはあらざるか。吾兄と共にかく思ひて語らひぬ。ああ此の月の一夜はまことに物思まされる小夜なりき。」

箕輪や石島に代表される、当時の中学生たちの、豊富な語彙、特に漢語の素養には驚かされます。漢詩を吟ずることなども、当たり前であったようです。旧制中学生たちには、江戸時代以来の漢文素読の伝統が、残っていたものと思われます。

＊校歌作詞の堀越

彼の生家は、高浜入（たかはまいり）を目の前にした、現在の石岡市井関にあり、実家や船上から眺めた月を踏まえて、「蘆の枯葉に秋立てば　渡る雁（かりがね）声冴えて　湖心に澄むや月の影」と詠ったのでしょう。

(注3)**十六島**（じゅうろくしま）
千葉県北東部から茨城県南部に跨る、利根川下流の干拓地。香取市・神崎町・稲敷市に広がる。徳川家康が関東に移封された後の1590「天正18」年から開発を始め、約50年を要して完成した。利根川と霞ヶ浦に挟まれた低湿地に16の新田集落が造られたため、この名がある。

(注4)**霜満軍営秋気清**
上杉謙信が能登の七尾城を攻略中、たまたま九月十三夜の明月に会し、陣中で作ったとされる七言絶句『九月十三夜』。
「霜は我が陣営に満ちて、秋の気は清く澄み渡り、いかにもすがすがしい。空を仰ぐと、幾列かの雁が鳴き渡っており、夜半の月は皎々と冴え渡っている。
さて今夜は、越後・越中の山々にさらに能登も併せて、誠に雄大な景色が眺められることだ。故郷の家族たちは遠征の我が身を案じていようが、それはそれでかまわない（今夜はこの明月を心行くまで眺めようではないか。）。」

(注5)**観世音の霊地**
歩崎は、霞ヶ浦の土浦入と高浜入とに挟まれた、新治台地の東南端の岬。歩崎観音は、正式には「宝性院歩崎山長禅寺」と言い、歩崎の高台に建つ寺。本尊の十一面観音は、「安産」と漁師たちの「水上安全」の守り神として、平安時代から厚く信仰されてきたという。境内の、東屋に設けられた、霞ケ浦が眼下に広がる展望台からは、左に天王崎、正面に三叉沖、右手に浮島・大山の絶景が望める。

(注6)**下宿の一室**
当時は、交通網が十分に整備されていなかったため、遠方からの生徒は、寮や下宿での生活を余儀なくされた。

（高21回　松井泰寿）